

傀儡子の住吉大神

古要神社大祭

久留米大学 山口信枝

はじめに

かつての日本民族がもっていた宗教の思考様式は現代とどのように違うのであろうか。あるいはあまり変化していないのであろうか。その解明の手段として宇佐神宮（大分県宇佐市）の放生会をとりあげる。

祭はその国の文化の集積である。祭の構造を解明していくことは、日本民族のもつ宗教的感覚の解明につながる。古代から続く宇佐神宮放生会は、八幡宮の中で最古の祭祀として全国八幡社に伝えられたものであり、さまざまな因子を含んでいる。広範囲に及ぶ「巡り歩き祭」であり、五穀豊穡儀礼である。朝鮮半島からの外来因子が相当強く移入されており、傀儡子の舞・神相撲がある。奈良の大仏建立に際しては銅山として多大な貢献をした。その他にもさまざまな因子が考えられる。

ここでは宇佐神宮放生会における重要な奉納儀礼のひとつである傀儡子の舞と神相撲を取り扱う。これは八幡古表神社（旧古表社・福岡県築上郡吉富町）と古要神社（旧古要社・

大分県中津市）の二社が奉納するもので、現在では八幡古表神社が四年に一度、古要神社が三年に一度、地元の神社でのみ奉納し、宇佐神宮放生会での奉納は行っていない。

まず宇佐神宮放生会の概略を示した後、古要神社の祭を中心として、祭の時間と具体的行動を叙述し、傀儡子の住吉大神のもつ因子について考えてみる。

一 宇佐神宮放生会

一 放生会の開始・その構造と全体図

七二〇年（養老四）に大隅・日向の両国に住む隼人が大和朝廷に反乱をおこす。その鎮圧に宇佐神宮の八幡大神とともに参加した古表社・古要社の二社は傀儡子の舞を舞って隼人を城から誘い出し戦勝に貢献する。その後隼人の霊を慰めるために放生会を行えという八幡大神の神託が出され、隼人の霊として鱈を放生し、古を表す傀儡子の舞が奉納されたのである。

宇佐の放生会は、陸路から、海路から、そして宇佐神宮か

らも行列をなして宇佐の和間浜へと集まり、全体がひとつになつて放生儀礼を行う。中野幡能氏の説にもとずき、あえて私なりの解釈で説明するならば次のとおりである。

①銅鏡を神として陸路を歩く約六二kmの行列―田川郡の採銅所からの銅鏡の奉納

②傀儡子を神として海路を進む約二五kmの行列―旧上毛・下毛郡の傀儡子の奉納儀礼

③宇佐神宮からの御神幸約八kmの行列―八幡大神の宇佐郡和間浜への出御

それぞれの集団が神とともに行列をして和間浜に集まり、放生会を行うということである。これらは個々に発生した祭を単につなぎ合わせたものではなく、全体を貫いたひとつの祭として包括されたものであると考える。なぜ巡り歩くの祭が長い過程を経て行われるのであろうか。なぜ巡り歩くのであろうか。現在は次のような仮説をたてている。「この巡り歩く祭である宇佐神宮放生会は、地域全体の統合意識と民衆のアイデンティティーの確立のために、為政者の側からも民衆の側からも、ともに必要とされた祭ではないだろうか」目に見えない宗教を巡り歩くという行動によって具象化する。日常の俗なる生活から分断され聖なる時間の行列を行い、聖なる時間の経過のなかでその中心地に集合する。集団のなかにあつてこそ人はより明確に自分自身を確認することが出来るのではないだろうか。傀儡子の分析とともにこれからの大きな課題である。

二 古要神社（・当初はコヒヨウと呼ぶれらる）大祭

息長帯比売命おきながのひめのみこと（八幡大神とされる応神天皇の母・神功皇后）とその妹神の虚空津比売命そらつひめのみことを祀る古要神社は八幡古表神社と姉妹社であり、古要神社の御神像は傀儡子である。二社はともに杖頭人形の傀儡子を神とし、その神である傀儡子が細男舞くわいごまひを舞い、神事相撲である神相撲かみずまをとるのである。

一 古要神社傀儡子の舞と神相撲奉納

古要神社の祭が一九九三年（平成五）十月十二日に斎行された。八幡古表神社では一九九二年（平成四）に斎行されている。古要神社の祭は氏子による宮座組織で運営され受け継がれてきている。二社の傀儡子はともに国の重要有形民俗文化財の指定を受け、傀儡子の舞と神相撲は国の重要無形民俗文化財に指定されている。

鳥居に大注連繩がかかけられ神社の二箇所の入口には笹竹と繩で作った高注連繩が張られている。神事が催される聖域の明確化である。通常の拝礼は二礼二拍手一礼であるが、祭典では二礼四拍手・四拍手一礼の拝礼を行う。宇佐神宮の拝礼の仕方である二礼四拍手一礼と関連しているものと思われる。日暮れ時から神楽が舞われ、日没後に傀儡子の奉納儀礼が行われる。これは昔の日本人にとって、一日は夕日が傾いてから始まるとされていたことにもとづくものである。夕方から朝までの一夜が祭の大切な部分であり、夜が神の時間であ

り、神の臨幸も夜行されるといふことである。

舞人形の胴体は一本で作られて足がなく棒状の杖頭人形である。操り手が握りやすいように下細りになっている。両手は両肩にクギでとめられており、操る場合は片方の手で人形の胴体を持ち、もう片方の手で両腕の付け根につけられた糸の先端を引いて動かすのである。舞人形の体長は四〇・三 cm から二六・二 cm で二六体ある。相撲人形は片足が胴体と連続しており、可動する手足は下から糸を引いて操る。相撲人形の体長は六五・七 cm から三三・〇 cm で三〇体ある。その他に指先で直接操る手人形のあずまどうじ小豆童子が二体と獅子頭が二体あり合計六〇体である。氏はこれらの傀儡子を「お神様」と呼び、他所の人に見せたり写真をとられることには消極的でその都度四人の宮総代の合議制で決められる。

申殿の両端に笹竹を立て幕を張った空中舞台が作られる。囃子方は申殿前の舞殿に控える。傀儡子の奉納儀礼はまず笛・太鼓・鉦（チャンガラ）によって「神起こし」が行われる。続いて竹筒を首にかけ、笹を手にした「御祓神」によって式場が払い浄められる。舞台中央から獅子頭二体が登場し、続いて小豆童子二体が登場する。次に神霊の宿れる座としての御幣や鉞・刀を手を持った舞人形が幕の下からすつと空中に登場する。二体から四体で一組となり次々と登場して細男舞を繰り返す舞う。細男舞は囃子に合わせて両手を上下に上げ下げし、身体を左右に振る簡単なしぐさの舞である。途中に御神歌がはいり、また囃子に合わせて細男舞が舞われる。

この形態のなかに古い日本人の神に対する姿を見ることが出来るといえるであろう。まず幣束と同じ神の力の表示であ

る笹によって場の浄めを行うとともに神の仰せを聴けという指令の形をあらわす。神がかりの促進作用としての囃子の音楽と、単調な神を讃える詞の連唱としての神歌がある。単純な舞は神への讃えことを語っているうちに人が神の境にはいつたものという場面を想起させる。

また舞台の両端には怒りの形相をした赤と緑の面が鉞先にかけられている。これは単人の首を持ち帰った時の姿を表しているというが、祭が過去を表象し人々の心に深く刻みつけておく目的のために行われるという一面を示している。

細男舞の舞に続いて傀儡子は神相撲をとる。相撲は日本の国技といわれているが、互いに四つに組み、手を用いて相手をつかんで倒す原始的形態は、大昔から世界中で行われている事実がさまざまな発掘品や遺品で明らかである。相撲は本質的には農業生産の吉凶を占い、神々の思召し（神意）を伺う神事として普及発展してきた。五穀豊穰を祈願し、神明の加護を感謝する農耕儀礼として相撲が行われてきたのである。相撲は神の存在を想定した人々が、相撲という人為的行為によって神の支配する秩序や運命を目に見える現象として知ろうとする神託のひとつと考えられる。

八幡古表神社の神相撲の決まり手は六種類ある。①押し倒し②突き倒し③ねじり倒し④引き倒し⑤撲り倒し⑥蹴倒しである。古表神社では相撲の決まり手に特に名前はないが、相撲の内容は二社ともほぼ同じである。この決まり手は八二一年（弘仁十二）に宮中儀式として制定された相撲節すまひのせちにおいて危険であるとの理由で禁止された、蹴る、突く、撲る等の技が含まれている。またこの傀儡子の相撲には相手を

二 傀儡子の住吉大神

土俵の外へ押出して勝つという決まり手はない。土俵が出来たのは江戸時代であり、それ以前は相手を地面に倒すことによつて勝負が決まったのである。これらのことから傀儡子の神相撲は古い相撲形態を残しているということがわかる。

神相撲は東西の相撲人形が一体ずつ登場して、ハヤモン(早物)と呼ばれるテンポの早い囃子に合わせて勝ち抜き相撲(掛り相撲という)をとる。初めは東西が交互に勝つが中頃から西方の負けが続ぎ、二人がかりから八人がかりまで順次人数を増やしながら向かつていくが連敗する。しかし西方の代表である住吉大神が登場してからは西方が勝ち続け、東方の代表である祇園大神にも勝つ。今度は東方が人数を増やして住吉大神に立ち向かつていき、最後には西方の住吉大神対東方の相撲神全員による押し相撲となる。ここでも住吉大神は全員をなぎ倒す。演技と競技の興奮の中で傀儡子の住吉大神は境内に集まる人々の応援と喝采を受けて、勝利の挨拶をして退場していく。これで傀儡子の奉納儀礼は終了する。この住吉大神にはさまざま因子が含まれているようである。

傀儡子の住吉大神は髪を美豆良みまじらに結び、体は真っ黒(古表社)かまたは黒褐色(古要社)で赤色の禪を締めている。他の相撲人形の肌は灰色や肌色や白色であるなかでひときわ目立った黒色をしている。体長は三三・二cmで、東方代表の祇園大神の六五・七cmの約半分の大きさである。その住吉大神が祇園大神をはじめ東方全員相手の押し相撲でもすべて勝つのである。これは定められた勝負結果である。

住吉大神は墨江神すみゑのみかみともいい、伊弉諾尊いざなのみことが筑紫日向之橘小門つくしひなたのつばきこの阿波岐原あわぎのはらで禊をしたとき、阿曇連あつみのむらじの祀る海神少童うみかみ・海津見うづつみ三神みとともに出現した神である。底筒男命そこつのおのみこと、中筒男命なかつのおのみこと、表筒男命うわつのおのみことの三神をあわせて住吉大神という。

宇佐神宮と住吉大神は三之御殿の祭神である神功皇后との関係において語られる。仲哀天皇崩御後神功皇后は住吉大神の託宣によつて新羅(三韓)平定を行う。その戦略において潮の干満を自在にする宝珠を得るために龍宮への使いとして磯良いそらが選ばれる。しかし海に住む磯良はカキやヒシの貝類が顔にとりついてその顔の醜さのために御前に出てこようとしてない。そこで住吉大神は自ら歌を謡い、舞楽を好む磯良を海中から呼び出す。磯良の神は海部である安曇氏が祖神として齋き祭る神であるが、磯良は袖で顔を隠し亀に乗つて現れる。この故事にのつとり磯良の舞すなわち細男舞では白布をもつて顔を覆うとされてい。古要神社では二体の磯良神は女神であり、白紙を筒型にして面を覆っている。三韓平定の際に住吉大神の和魂は皇后の寿命を守り、その荒魂は先頭となつて船舶を導いて偉功を立てたといわれ、皇后は凱旋のときその荒魂を穴門あなぐちの山田邑やまだのむら、(現在の下関市楠乃)、和魂は天津の淳中倉あつちゅうくらの長峽ながのせき、(現在の大阪市住吉区住吉)に祭らせている。また摂津鎮座のさいに「海上を」往来ふ船を看む」との神告があつたというので、古来海上守護の神として漁業者や航海業者の信仰があり、遣唐使の発遣のときはまずこの神に祈るのを常とした。また新羅平定の偉功により従軍神として武家

の間にも尊崇を受けた神である。

八二三年（弘仁一四）宇佐神宮三之御殿神功皇后の脇に住吉神社が奉斎された理由のひとつは、神功皇后と住吉大神のこのような故事が考えられる。

この住吉大神の名をもつ傀儡子が黒色の肌に赤色の禪を締め、神事の相撲をとり、小さい体ですべての相撲神に勝つのである。この具象的表象はなにを意味し、人々はなにを理解し納得するのであろうか。

(1) 黒色（黒褐色）の肌

黒色の肌について考えてみる。黒は死なない喪の色であることは通常一般的な現象である。しかしその一方で天皇が北斗七星等を拜んで息災長寿の呪文を唱える四方拝というのがあり、皇極女帝が祈雨のため四方拝を行ったという記録がある。（『日本書紀』皇極元年八月一日）また北辰すなわち北極星のちには北斗七星をふくめた北辰信仰がある。この北辰信仰は仏教の星を信仰する宗教と習合して妙見信仰となる。妙見は北極星を神格化した仏教の菩薩の名で北辰菩薩である。中国六朝時代の漢訳仏典である『七仏所説神呪經』には妙見は「衆星の中で最も勝れた星、神仙の中の神仙、菩薩の大將」と説明されているという。宇佐神宮においても二之御殿比売大神の脇殿として北辰神社が鎮座している。この信仰によれば北は天帝の位置する場所であり、北方の色である黒は天帝の色ということになる。北は暗黒ではあるが物事の始まりが胎動するところであり、黒は黑白未分の原初の状態の色

を指し示し、すべての創造の根源の色である。黒は誕生再生を意味する色となる。階位によって衣服の色を定める衣服令によると、七一八年（養老二）の養老令では紫一緋一緑一縹の順で黒は最下層の階級を表す色彩と定められた。しかし九〇年（一条天皇正暦元年）には、黒一緋一緑一縹の順となり黒が首位となっている。これは黒色が天帝の色という認識が影響を及ぼしているのではないだろうか。

地元の人達は住吉大神の黒色については、住吉大神は海的神様であるから肌が日に焼けて色が黒いのだという。

稲作農耕民族にとって稲の成育に必要な水の確保は最大の関心事である。朝廷では晴れを祈るには赤い馬、雨を祈るには黒色の馬を神社に奉納している。馬駆けによる年占いで田植えの月に該当する馬の色が黒であるとその年の水の確保が約束されたということ喜んでという。これらのことから雨を表す黒色とみることも出来る。神相撲においても水の神である祇園大神を倒すことよってその年の水の確保が約束されるという解釈も出来る。宇佐神宮の神験は中世からは戦神・軍神として知られているか、古代の神験は祈雨の神であった。

『八幡宇佐宮御託宣集』の阿蘇縁起中において、龍神の住むといわれる龍宮城から奉られたというすぐれて逞しい馬・神馬である龍馬は黒色としている。またその中で『止観輔行伝弘決』の引用として、黒色であるという理由から龍と名づけるとしている。龍も雨をもたらすものである。

当社の神馬、黒色は龍馬なり。大菩薩、応神天皇の後、靈行の間、御母大帯姫の約束に任せ、龍女を娶らしめ、生む所の君達、若宮・若姫四人の時、龍宮城より二疋を

進らるるなり。私に云く。弘決第一に云く。驪龍は黒色にして角無し。龍に準しきなり又、驪は黒色の馬なり。今黒色なるを以て、龍と名づく。故に驪龍と曰ふと。已上。

いくつもの象徴性を重ねあわせながら黒色の住吉大神が存在するのであろう。

(2) 赤色の禪を締める

赤色は火・太陽・血等と結びつく。北辰信仰に対して南方に配当される火の神で生命の蘇り、あの世での生活の安全を保証するという天上世界の星を神格化した「南方火徳星君」がある。日本においては一部戦国大名の間で信仰された。より古い形では天武天皇が亡くなる前に持統天皇は朱鳥しゆちゆうと年号を改めて天武天皇の生命の蘇りを願っている。

その天武天皇は戦のなかで味方の肩に赤色の布を着けさせた。これは『史記』封禪書の「漢、衣は赤を上ぶ」の影響とみられている。『古事記』序、『日本書紀』天武天皇元年七月二日)

赤色は火と結びつく。神を招くもの、神を憑らしめるものとして先ず高くそそる物で直ぐ目にとまり易いものとの考えから、燈火（高燈籠）が考えられた。精霊誘致の手段として祭りに宵宮が保たれているのはこのためであるという（石上堅著『日本民俗語大辞典』一九九二年 桜楓社）。宇佐神宮放生会では神輿を迎える道々に高張提灯が高く掲げられ、古要神社の境内にはかがり火がたかれ、神の臨幸を願うのである。

古代の闇の中で「あかり」は、神の依り来る印としてふさわしいものであったと思われる。

また漁師の間にはサメやフカに襲われそうになったときには赤禪を解いて足に巻きつけるとよいという言い伝えがある。住吉大神の赤禪はこれら赤色のもつさまざまな解釈と、それらに基づく言い伝えにこめられた民俗感情の現れを示しているものと思われる。

宇佐八幡宮に関する赤色では、宇佐神宮そのものが朱色の社である。そのなかに安置される若宮御形像五軀のうち第二の御正体は聖人の御躰であるとして、その装束と身体は赤色である。

・第一の御正体 聖人の御躰なり。御装束は皆赤色にして、御身も又赤色なり。左右の御手は胸に留め、其の上に座具を懸く。

また銅鏡を奉納する香春の司祭、赤染氏は赤色呪術を行うという記述がある。

赤染氏（新羅氏香春神司祭）新羅系、赤色呪術、秦氏同族常世連と改姓名、常世信仰（日本古代氏族人名辞典）

また韓国の流浪芸人集団「男寺兜牌」が操る人形芝居に「コクトウカクシノルム」がある。人形は杖頭人形であり、指使い人形もいくつがある。古要神社の小豆童子と男寺兜牌の上佐人形、獅子頭とイシジミ（蛇）はその形態において類似している。住吉大神と洪同知ほんどうちは裸体であることと力持ちであることが類似し肌の色は古要神社が黒褐色であるのに対して男寺兜牌のものは全身赤色である。古要神社も男寺兜牌ともに柱をたてて幕を張った空中舞台を作り、囃子方は舞台の内側で

はなく舞台の前に並ぶという舞台構成で演じられる人形劇である。

(3) 小さい体で力が強い

住吉大神は体軀短小ながら異常な能力を發揮する。古来日本には丹塗矢型神婚神話・桃太郎・瓜子姫・一寸法師（本来はチイサクと呼ばれた）等半ば神であり半ば人間であった小さい子説話が数多い。

神話における小さい神としては少彦名命が挙げられる。少彦名命は神産巢日子で他界より寄りきて、現世的な力や権威を代表する大己貴神（大国主神の前身または別名）と兄弟になつて葦原中国の国作りを行う。常世神、稻種や粟をもたらす穀靈、悪童的な小人神、山や丘の造物主・命名神、酒の神等の屬性が与えられている。医療、禁厭の法を定めたとされ、温泉の開発神とされている。（『日本書紀』神代上）

中国の文献では、侏儒は短小な人、俳優の意味として使用され、特に侏儒の奏する歌舞音曲である侏儒樂が戰略として使用されている。

頰谷之會、齊侯侏儒樂を作し、以て定公を執えんと欲す。
〔公羊、定、十、夏公會齊侯于頰谷注〕

これは放生会の起源とされる隼人の乱において、傀儡子による細男の伎樂を奏して、城にたてこもる寇賊の心をとろかし、疲れていた官軍側の士気を奮いおこして敵を討つたという故事に類するものである。

中国の明の時代に書かれた『草木子』においては、海から現れる人としてその形容は小さな人としている。

計に必ず海人有り。嘗て海賈の云うを聞く。南海、時に海人の出ずる有り。形は僧の如く人頗る小。舟に登りて坐す。至らば則ち舟人を戒めて寂然として動かざらしむ。少頃にして復た水に沈む。否なれば則ち大風舟を翻す。又大金の時、竜の燕京の舊塘樂に見るる有り。手に一嬰兒を託す。少年中官状の如く、紅袍玉帶す。略畏怖の容無し。三時を経て始めて没す。此に由りて之を觀れば、水にも亦人類有るなり。但し幽明にして相い隔たりて相い知るべからざるのみ。

分靈を希望する日本の神は神靈の宿す所である中空の瓠の中や空舟に入つてうかび来る。神は海から寄り来るものという觀念は昔の人々にとつて受け入れやすいものであつたことが察せられる。現在では中断しているが宇佐神宮の重要な神事に行幸會がある。これは御正體の薦の御驗を空舟に乗せて海に流すというもので、この御驗は四国の伊予国に流れ着きその地にまた分靈されていたのである。『八幡宇佐宮御託宣集』の大隅正八幡宮には太陽を父とする八幡神の空舟伝説が語られている。

大隅正八幡宮縁起

八幡の御母は震旦の陳大王の娘大比留女で七歳にして懐妊する。誰と交抱したかと問うと、夢の中でやんごとなき人と寝たりと思ひ目覚めて四方を見ると、朝日の光が胸の間にあり、その日から心安からず懐妊したという。

三、四年後に陳大王は空舟に母子を共に乗せ印鑑を相具して流し、流れ着く地を所領とせよと言われた。そしてついに日本の大隅の岸に辿り着いたという。

三 氏子組織のニワタシ（荷渡し）

古要神社の宮座は四組で各組一年交代で神社を守り行事を運営している。祭が終わるとニワタシ（荷渡し・トウワタシ（頭渡し）ともいう）が行われる。午前中に鳥居の注連縄や笹竹の鳥居を片づけて一年間担当した組の人達が見守るなか、礼服姿の宮総代、座元、長老が神社の舞殿に備品目録と現物を広げ、経費報告にもとずき氏子の負担額が算出される。旧座元が新座元を迎えに行き荷渡しがおこなわれる。旧座元の自宅では組の男性が中心となり氏子負担金の徴収から料理の献立・材料の買い物までして直会（まじりあひ）を行う。これにより祭は終了し人々は日常生活へと戻るのである。

おわりに

今回は理論分析に先駆けて古要神社のフィールドワークを詳しく叙述した。祭の構成・形態・傀儡子の因子を羅列することによって、古代日本人の宗教観の一端と朝鮮半島をはじめとする外来因子が見出された。とくに傀儡子の住吉大神が、黒色の肌と赤色の禪を締め、小さい体で相撲に必ず勝利するという具象的表象はさまざまな信仰や言い伝えが複合されたものであり、ここではそのなかの一部分を取り出したにすぎ

ない。色のもつ意味については主に宇佐神宮に関連した資料や事物を中心にしており、この地域的な色の特質がより広い地域において普遍的なものとなりうるかどうかは、これからの研究課題のひとつである。

それぞれの因子は時代と世相に拘束され、ある因子のみが特に拡大されたり、あるいはその焦点を随時移動させながら、民衆に受け伝え続けられてきたのである。今後は現地調査資料をもとにして、傀儡子の分析を行うとともに、なぜ三つの集団が長い道のりを宇佐の和間浜まで出掛けて放生会を行うのかということを知りていくつもりである。

夥しい情報のなかで自己を見失い地域共同体の崩壊やアイデンティティーの喪失が危惧されている現代において、古代から続く祭の意味を考えていくということは、これからの日本人としての精神生活の示唆となるものが見出せるのではないだろうか。

注引用文献

(1) 『宇佐市史』下巻、賀川光夫監修 一九七九年 宇佐市史刊行会五頁

『中津市史』中津市史刊行会編一九六五年 中津市史刊行

会

(2) 柳田國男著『定本柳田國男集』、一〇巻「日本の祭」、一

九六七年 筑摩書房

(3) 池田雅雄『相撲の歴史』、一九七七年 平凡社カラー新書

六一

(4) 福永光司『道教と古代日本』、一九八七年 人文書院二一三～二一五頁

(5) 『続日本紀』一 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注一九九〇年 岩波書店 新日本古典文学大系一三

(6) 重松明久著『八幡宇佐宮御託宣集』、一九八六年 現代思潮社三二八～三八三頁・三九〇・三九一頁

(7) 同掲『道教と古代日本』二一三～二一五頁

(8) 同掲『八幡宇佐宮御託宣集』三八三～三八四頁・三九一～三九二頁

(9) 韓国の伝統人形芝居『コクトウカクシノルム』、韓国民俗劇研究所編

梁民基・平井美津子 訳 一九八六年、財団法人現代人形劇センター

(10) (明)葉子奇著『草木子』、一九五九年 中華書局出版一五頁

(11) 同掲『八幡宇佐宮御託宣集』八八～八九頁・一〇四頁

参考文献

中野幡能著『八幡信仰史の研究』、一九六七年 吉川弘文館
『古事記上代歌謡』、荻原朝男・鴻巣隼雄 校注・訳一九八九年小学館

『日本書紀』日本古典文学全集一上下、井上光貞監訳一九八八年(上)一九八七年(下)、中央公論社

『八幡古表神社の傀儡子』吉富町文化調査報告第二集一九八

九年 吉富町教育委員会

『中津市古要神社の「くぐつ」』大分県文化財調査報告書 第九集 一九六三年 大分県教育委員会

『重要有形民俗文化財修理解説書』古要神社一九五六年指定拙稿「宇佐神社放生会傀儡子の舞と神相撲」、『比較文化研究』第二号 一九九三年 久留米大学紀要